

第73回北日本図書館大会北海道大会・第62回北海道図書館大会概要

- 1 期間 令和4年(2022年)6月8日(水)～7月15日(金)
2 方法 オンライン動画配信 ※基調講演はライブ配信(6月8日)及びアーカイブ配信、
その他は大会期間中オンデマンド配信

3 参加者数 263名(講師・運営者含む)

4 内容(概要)

(1) 基調講演「“ライブラリー・ダイバー”～世界遺産『縄文』の意義を図書館で探す～」

講師：東北芸術工科大学准教授 青野 友哉

私たちは、図書館の“海”の中に泳いで行って、様々なジャンルの多くの知識を得ることができる。北海道・北東北の縄文遺跡群の価値や世界遺産になった意義について、考古学や縄文の多種多様な広がりを表すたくさんの本の紹介や、最新研究の成果なども交えながら説明していただいた。



(2) トピック

ア 「世界の宝『縄文(JOMON)』を通じた函館の地域活動」

情報提供：縄文DOHNANプロジェクト代表 山田 かおり

産学官民協力によって「縄文の心で人とまちをつなぐ」をテーマに、縄文の心を知り、世界遺産を通じてまちを知り、愛郷心が育つように活動している縄文DOHNANプロジェクトの発足から今後の展望までをお話しいただいた。



イ 「北海道内 新館紹介」室蘭市図書館・古平町図書館

情報提供：室蘭市図書館長 伏見 聡、古平町教育委員会主事 永井 野乃子

令和3年(2021年)12月に新館が開館した室蘭市図書館と、令和4年(2022年)5月に条例が施行され、新施設内に開館した古平町図書館について、それぞれのコンセプトや特色等を紹介していただいた。



室蘭市図書館



古平町図書館

(3) 第1分科会「社会に開かれたコレクションの系譜～北海道大学附属図書館北方資料～」

講師：北海道大学教授 谷本 晃久

北海道大学附属図書館にある「北方資料」というコレクションは現在、デジタル公開が進んでいるが、以前から社会に開かれた閲覧対応をとってきた歴史があった。北方資料コレクションの概要とともに、大学図書館と社会との関係の歴史として、その形成史や関わりの深かった教職員などに触れながら、資料公開の意義について説明があった。



(4) 第2分科会「絵本が紡ぐフォークロア～現代絵本に描かれてきたもの～」

講師：帯广大谷短期大学附属図書館司書、絵本専門士 水野 有子

それぞれの時代で著者の目を通して描かれる絵本は、その時代のものの見方や考え方、社会的風俗などを反映し、結果として当時の生活様式や習慣を示すフォークロア（伝承・民俗）となり得る。長く読み継がれる中でも「時代」を感じさせない要因や、一方で「時代」を軸に巻き起こる論争への答えについて、現代絵本の変遷や絵本の普遍性・多様性をたどりながら考える契機が提供された。



(5) 第3分科会「『地域』にとって公共図書館はどのような存在か」

講師：一般社団法人北海道ブックシェアリング代表理事 荒井 宏明

公共図書館は地域内の学校図書館や他の教育・社会教育施設に対して、どのような立場でどのようにかわっていくべきか。読書環境の整備のあり方を自治体や振興局圏といった包括的な視点で捉えながら、知識基盤社会における公共図書館の役割について考えた。



(6) 第4分科会「ネット文化資源の読み方・作り方」

講師：北海学園大学講師 岡田 一祐

「私たちが残すものは、私たちそのものだ」をテーマに、自分たちが何者かを知り、それを後世に残す工夫の一つとしてネット文化資源の具体事例が紹介された。保存が難しい現物に代わる資料として残すことや、インターネットの仕組みを活かして資料を長く広く活用できることへの期待が示され、既存ネットワークの活用・連携のほか、ネット文化資源ならではの新しい価値を生み出す試みの事例も紹介された。



(7) 第5分科会「図書館が伝える地域の歴史～アイヌ文化を伝える～」

アイヌ文化を題材に、地域の歴史を伝えるために各図書館が行っている取組や連携の事例が紹介された。

「図書館が伝えるアイヌ文化」

事例発表：北海道立図書館企画主幹 工藤 尚子

「カリンバ遺跡と普及活動」

事例発表：恵庭市教育委員会主査 本間 洋一

「共生のまち白老からアイヌ文化をつなぐ」

事例発表：白老町教育委員会主査 本間 敬子

「図書館が伝える地域の歴史－アイヌ文化を伝える－」

事例発表：平取町立図書館主幹 清水 浩



北海道立図書館



恵庭市



白老町



平取町

※講演・分科会等の詳細については、大会記録集を発行しています。

『第73回北日本図書館大会北海道大会・第62回北海道図書館大会記録集』（北海道図書館連絡会議 2022）